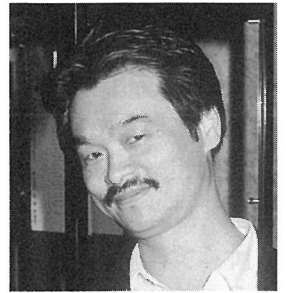


漆 伝 統 工 芸 世 界 を め ぐ る

漆芸家 更 谷 富 造



私の過去23年間、海外生活あるいは京都での修行を含めまして、私自身が経験して、体験して感じたこと、見たこととお話したいと思います。

北海道に私移って来て、海外で過ごして来たと言え、新聞記者とか雑誌社の方々は、海外でどういう勉強をされたんですかと聞かれます。私は、海外に勉強しに行ったのではなくて、向こうから教えてくれと云われて、日本の技術を教えに行っただと答えます。

それはどういうことですかと初め理解できない。漆工芸品が海外にたくさんある、一般の方々は、どうして海外に漆の物があるんだと、そこら辺のところを理解できない。その点ちょっと触れたいと思います。

一番最初に日本の漆器が、工芸品が海外に流出したのは豊臣時代なんです。これは、長崎の出島を通じて、漆工芸品を販売した。メイドインジャパンを海外に売って、外貨を稼いだということです。この当時、南蛮貿易ということで、漆器の名前も南蛮漆器と呼ばれております。それが第一波で、かなりの量が海外に出ています。

ヨーロッパにおきましては、一番多いのはオランダで、そういう漆器がたくさん存在しています。

16世紀の終わりから17世紀、18世紀までそれが続きます。

南蛮漆器の後、第二弾流出と云うか、海外に出て行ったのは徳川時代末期から明治初期です。

明治維新で徳川幕府が倒れた。その幕府を倒すために、薩長軍が手を組んで内乱状態になった。そして、ヨーロッパの強国が、フランスが徳川幕府につき、薩長軍にイギリスがついた。当時の日本は鉄砲、大砲、軍艦そういうものを欲しがった。その代価として、欧米人はこぞって金、銀、小判は勿論のこと、漆工芸品にもものすごく魅力を感じたんです。

だから、徳川幕府によって持たれてた財産、資産あるいは徳川の紋である葵の紋は、フランスに行けば、

たくさん見られます。それは、フランスが徳川に加担して、軍艦、大砲を売って、それらの物の代価としていただいた。

薩長軍はイギリス、だからイギリスには薩摩の薩摩焼とか薩摩の丸に十文字がある紋が入った漆工芸品もたくさんあります。

明治6年に、ウィーン国立博物館において万国博覧会が開催されました。日本は何を出して良いかわからなかった。ところが、シーボルトと云う人が、医学博士なんですけども、日本に生まれて、伝統工芸、漆だけでなく金工、焼物、七宝焼それらのものが、ヨーロッパの人達よりもレベルの高いものであるということをやヨーロッパに紹介しまして、明治政府が当時のお金で12万両というお金を借金しまして、工芸家達にそれを造らせたのです。それを約600点出品したんです。そこでそうそうたる賞をいただき、600点の内1/3をオーストリー政府にプレゼント致しました。そして1/3を経費として売却、残りの1/3はフランスの商船で日本に持ち帰られたんですが、伊豆沖で台風に遇いまして、残念ながらその物は船と共に沈没致しました。沈没して8カ月後に、宝物はいっぱいあるんだから、どこに沈んだかもわかっているんで、ダイバーを使って引き上げました。それで、8カ月間海の中に沈んでいた漆が見事に復元された。ほかの金工品は錆びてぼろぼろになってたんだけど、漆は何故か全然問題なかった。当時、そういうことが世界のトップニュースになりまして、全世界にそのことが知らされた。そういうことで、欧米人達は、漆とはどういう塗料なのかということの研究したいということで、特にドイツが興味を示しまして、多くの研究者を日本に派遣し、イギリス政府も技術者を派遣し、当時のダンヒル社、パイプを造るダンヒル社が漆のことを研究したいということで、熱い目が日本に向けられたということがありました。

私がウィーンに行ったというのは。

そのウィーン博覧会にプレゼントされた600点の内の1/3が応用美術博物館に眠ってしまっていて、それを復元、修理したいので、早く修理人を寄越してくれと、10年間担当の人が日本政府に依頼の手紙を書き続けたんですけれども、一通も返って来なかった。

そこで、個人的に当時のボン大学のガリンスキー・クリスチャンと云う人が、こうこうこういうことで技術者と材料と道具が欲しいんだということで、京都で折衝したんです。その話を聞いて、私は、これは政府感覚でやるべきでない、これは民間でやらないとうまくいかない、私で良ければ一度視察に行っても良いですかということで、1973年に1カ月間視察に行ったわけです。

それでびっくりぎょうてん致しました。このような物がどうしてここにあるのかと。

博物館だけでなく、シュバルテンベルグ侯爵、リヒテンシュタイン公国にも漆の物がたくさんあり、ユーゴスラビアのあるちっさな町のお城の中にもあり、フランスの各城々、スイスの城あるいはドイツ、勿論スカンジナビアの国々にも膨大な漆の量がある。

これを全てやるには300年、400年、私一人がんばってもどうにもならんということを目のあたりに現実を見ました。

私はオーストリーに9年いまして、私が一生かかっても解決できないんだから、私の残りの人生をどうしようかという考えになりまして、これは何とか日本に私の経験を持ち帰り、若い後継者を育てる、私自身も作家として育った人間だからながしかの物をこの世に残したいという気持から、イギリス、アメリカを経まして日本に帰ってきた次第です。

当時ウィーンも大不況で、イギリスに渡った時も英国病と皆さん云われて、マーガレット・サッチャーが一生懸命やったんですけども、いっこうに景気も良くならないという時代でした。私3年間住んだ時に、あそこの湿った空気と天候によって、リュウマチが起こりまして、この国はちょっと良くない、税金も高いし、将来性もないし、英国病と呼ばれて将来性もないので、ともかくイギリスを離れたいとぼろっと話したら、アメリカのある銀行家が、富造アメリカに来るんだったら協力するよ、ということでアメリカに渡った次第です。そのアメリカに渡った時もやはりアメリカの大不況がすでに始まっていたんです。当時ジョージ・ブツ

シュの時代で、皆さんご存知のように、湾岸戦争が始まった。

それで私、10年前に北海道、一番最初に旭川に移って来ました。それからまた日本が不況になりました。

よく考えてみたら、オーストリーでもイギリスでもアメリカでも日本でも不況ばかりだ、まあこの不況でもなんだかんだと仕事はあった、むしろいくらでもあった、この漆というのは一番強いんじゃないか、不況であろうと好況であろうと関係ないんだということがわかったんです。

1930年代に世界大恐慌というのが起こりました。その時にアメリカ政府がまとめた資料を、アメリカのシカゴにいる時に読んだことがあるんです。

1930年に失業率20%以上、ほとんどの人間が失業です。どんどん企業は倒産、銀行も倒産。そういう時代になおかつ脈々と生きてたあるいは活気があった、活況があった業種を全部ピックアップしたものです。その中にやはり修理業というものがあつたんです。修理業いわゆる物を大切に使って、それを復元してまた使う、この修理業というのがどの時代にもめげないということを発見した。

ましてや、文化財を修理するというの一番大切なことだ。それに引き替え、日本は大切にやっているかなあと見たら、どうも使い捨て文化が進み過ぎて、古い物を大切にしようとか、なんでも鑑定団とかお宝拝見とかはやってますけど、何かその辺のところ欠けているような気がしたんです。

それを是非私の生きている間に、若い人達に伝えたい。こういう姿勢で技術を勉強すれば、安定的な生活もでき、なおかつ発想を転換しながら、新しい物を造れば、日本国内だけじゃなくて、海外にも販売可能なものがたくさんあるよ。何故なら、漆工芸というのは日本独特の文化で、世界の他の国には真似のできないものである、そういうことを認識しろと。

日本がバブルの絶頂期に、私はイギリスにいました。その時に、ロンドン市内にまず三越百貨店がイギリスロンドン支店、つぎに伊勢丹、そのつぎに大丸、ほとんどの日本の百貨店がロンドン支店を設けました。そうした時にイギリスロンドン子達は、ああ日本のカンパニーが来た、じゃあ日本の饅頭とか扇子とか、何か日本の物を買えるかな、ロンドンに居ながらにして日本の物を買えるかなという期待感があつたんです。ところが、蓋を開けてみれば、バーバリーのコートとか

グッチーの何とか、何かイギリス製の物あるいはイタリア、フランス製のいわゆるブランド品を売っているわけです。それを見て、お客さんはだれなんだといったら、結局日本人がそこに買いに行くんですよ。

そうすると、イギリス人達あるいはヨーロッパ人の観光客はもうがっかり、こんなはずでなかった、どうしてなんだと、私がそこに住んでたんで、いつも聞かれるんです。

逆に、東京の銀座でヨーロッパの会社がオープンしたら、日本人はヨーロッパ製品を持って来てくれるもんだと期待するでしょ。何でそれが逆なんだというところで、日本の経営者の感覚が間違っているということが、その当時にぴんときたんです。

案の定、5年経ち、6年経ち、あそこが潰れた、ここが潰れたと、進出したところは全部倒産したんです。ところが、同じ時に、日本のお饅頭屋さんが、ピカデリーサーカスと云う一等地の高級ホテルの近くに、お饅頭屋さんをオープンしたんです。それが大盛況で勿論ロンドンには世界中から観光客が集まる、ヨーロッパ、アメリカ、東南アジア、そういう人達が全部お客になっちゃったんです。すなわち、日本独特の物だから、ヨーロッパ人は真似できないんです、東南アジアの人達も真似できないんです。

これから21世紀の戦略を考える場合は、何か日本の匂いがするものを売らなければ、生き残れないですよということを、皆さんにお伝えしたいんです。

あまり関係ない話ですけども、やはり日本独特のもので勝負しないと、いわゆる大量生産、大量消費、機械生産でやれば、東南アジアも追い上げてくる。韓国、中国だってどんどん追い上げてくる。そういうものは結局消え去る運命にあるんです。

韓国には螺鈿と云う貝と黒漆を併用した漆があります。中国には朱漆を何回も塗り重ねて、彫刻刀で彫る堆朱（ついしゅ）、黄色だと堆黄（ついおう）、黒は堆黒（ついこく）があります。これが中国独特の漆器です。

蒔絵（まきえ）と云う技術、これは漆と金粉、銀粉あるいは貝も含めて、筆で細かい仕事をする、日本独特の技術なんです。これは全世界で日本しかありません。欧米諸国では、この蒔絵に魅了されているわけです。蒔絵の付いているものは、金額も相当はりますが人々はどんどん購入致します。

オホーツク海の何か小さな貝がありますよね。紫色

の、ご存じないですか。その貝を見ましてですね、ああこれに金蒔絵なんか絵を付けたら、おそらく北海道産としてブランドを付けて売れるんじゃないかとふと思いました。

それで、先月から、私北海道に住んでるんだから、北海道らしいもの、そして京都の伝統的な技術、そして私の海外18年間で得たノウハウをくっつけて、何か面白いものがないかなといろいろ考えた末ですね、ホッキ貝に目が付いたんです。

あのホッキ貝と云うのはほんと単純な形をしていて、退屈なんですけど、内側が真っ白で、磨けばまるで磁器のようにテカって光る。

貝その物は地味だから、あれに派手な金蒔絵を施せばいいかなと思って、10種類程いろいろ絵を描いて、送ったら、今もう何十という注文が来ているんです。

それが一点3万から5万という金額なんですけど、安い安というふうな感じで。

皆さんホッキ貝なんか捨ててるでしょう。捨ててる物を文化的なものでひっつけば、レベルの高い商品になるわけです。そういうものはもっと目を拡げれば、北海道にはたくさんあると思うんです。非常に豊かな素材が北海道にはあるけれども、技術あるいは発想そしてデザインいわゆるソフトの部分が欠けているように思います。これからは、最も大切なものとして、ソフトというものに位置付けられた方がいいと思います。

私は北海道が大好きで移って来たんですけども、一番がっかりしていることが一点だけあります。それは泊原子力発電所のことです。

何故かと云うと。私がオーストリーにいる時、17・8年前ですが、オーストリー国第1号の原子力発電所を作ろうと政府が発表した。ドナウ河の畔のツベンテンドルフと云う所に第1号の発電所を作る。そうしたところ、反対派がどんどん増えまして、当時の首相は国民投票にしよう、たった一つの原子力発電所を作るのに、全国民の投票で民主的に選べということになったんです。投票の前の6カ月間をディスカッションの期間にしました。皆さんオープンで、賛成派はヤービッテ、反対派はナインダンケ、ヤービッテとナインダンケのステッカーを作りまして、私はナインダンケとべたっと貼るんです。そうすると、ヤービッテもナインダンケもレストランに行くと、皆ステッカーを貼ってるから、ディスカッションが始まります。レストランであるいは道端であるいは電車の中で。そういうこと

を見たの私初めてなんです。日本ではおそらく不可能なことだと、そんなことは。日本では、皆自分のことは内緒で、自分の考えは云わない、皆なあなあで終わっちゃうというところがありますから、これは素晴らしい国だと思いました。

結果は、ナインダンケの方が1%の差で勝ったんです。そして、第1号の原子力発電所は没になったんです。コンクリートの建物が出来て、あと心臓部をドイツから、ヘリコプターで運び込むという段階まで行って、首相はナインダンケだからいらないと云って、退けたんです。

それで、賛成派だった人は、これでオーストリーは二流国になる、また石炭を燃やさなきゃいけない、お前達はもう第三国になるぞ覚悟しておけ、というふうなことをばんばん云ったんですね。

ところが、結果は全く逆で、オーストリーは素晴らしい国だということ全世界に知らされ、原子力賛成派はどんどん退き、反対派の優秀なカンパニーがどんどんウィーンに、オーストリーに移住して来たんです。そして、レベルの高いプロフェッサーが、優秀なる科学者がオーストリー政府を頼ってどんどん入って来た。結局云ってたことと全く反対のことになったんです。昨年私がオーストリーに行ったところ、EU諸国の中で上から3番目の所得があるんです。ドイツよりもオーストリーの方が上になったんです。

あの時の結果が、オーストリーに自信を付け、そして世界の人々の注目の的になったということ、私は経験してきたわけです。それで、日本に帰ってきて、まさか北海道に原発があると思わなかったですよ。

旭川の支庁のある担当者の方に、単刀直入に聞いたんですよ、なんで北海道に原発が必要なんですかと。これは日本の国の方針で、各県に1個ずつ造る、これは平等という感覚で、皆欲しいんだと。おかしいなあ、もし泊が閉鎖して、クリーンな北海道のイメージを作れば、もっともっと優秀なるカンパニーが北海道に移住し、もっともっと優秀なる識者達が北海道を憧れの的として、引っ越して来るでしょうということ云ったんです。それは国の方針だから、どうにもならんべえ、で終わっちゃうんですよ。僕は堀知事さんに会えば、云いたいんです、北海道独自の物差しを作って下さいと。この物差しは、東京永田町で作る物差しよりも優秀でなければいけない。それは作れるはずですよ。なぜなら、こндаけ豊かな天然資源があり、広大な土

地があり、肥えた土地があり、素晴らしいじゃないですか。

私はそここのところに魅力を感じて、北海道に移って来たんです。

日本に来たことのある、サウジアラビアの人と話をした時のことです。

日本の温泉はどやって沸かしているんだ。あれは天然のエネルギーで、熱いお湯がでるんだ。日本全国で温泉の数はどのくらいあるんだ。こうこうこうだ。そこから湧き出るお湯を、石油換算したら、大量の石油を消費していることになる。日本人がそれだけ豊かで、大量のお湯を捨てるように、浴びるように、無駄に使っている、それは非常に羨ましい。わが国はオイルしかない、オイルと砂漠だ。とっても豊かな生活をし、とっても豊かな資源があるにもかかわらず、日本人はそれを豊かだと感じていないところが問題だ。

そういうことは、海外にいたら私も感じます。海外の人達の意見を聞くと、納得できる部分がたくさんあります。温泉の話もそうです。

私京都なんですけども、京都は1200年の歴史があります。1200年間、京都の人達は人間の営みがあり、野菜を作り、畑を作り、田圃を作り、してきたわけです。その土地は、1200年間使われて来たから、痩せてるわけです。痩せると、肥料もやらなきゃいけない。化学肥料もやだけどやらなきゃいけない。ところが、わが美瑛町の歴史はわずか100年、開基100年。たった100年しか住んでいないということは、100年しかこの大地を、土を使っていないということは、豊かなんです。物は何でも育つんです。タンポポにしてもツクシにしても、京都のとは全然違うんです。非常に寒い国にもかかわらず、成長は大きい。そして、イタドリ、フキそれらの雑草、薬草あるいはハーブ、全てを見ても、北海道の土地はこндаけ肥えてるんだとよくわかります。それはそうですね。京都は1200年使い古した土地だけど、北海道は100年しか使っていないから、まだまだ豊かさがある。

それともうひとつ、網走に、漆の栽培地があります。レポーターが入ったら、心配していた病気もない、そしてすくすくと育ち、葉っぱも本州より大きかったそうです。そうすと、やっぱり私が云ってるように栄養がいい。そして、雪国だから。雪というのは、水から雪に変わる時に、重水というものに変化するんですが、その重水が動植物にとって非常に豊かな資源を与える。

だから、雪も私にとっては素晴らしい資源なんです。あんだけの水を塞ぎ止めておくダムを造れば、どんだけ大きなダムを造らなければいけないか、おわかりでしょう。あのまま水を貯めておくことができる非常に合理的なものです。

そういうふうに、僕が目から見たら、全てがプラスに映るんです。

私の経験で、過去18年で37カ国、遊学も含めて見て来ましたけども、北海道のこの素晴らしさは、他に例がないです。

最後に、木に関する方々なので、少し木についてお話しします。

日本は、ご存じのように、紙と木で建物が建てられる。外国は、石とガラスと金属です。木はほとんどない。日本に近代的な建物が建つと、必ず石を入れたり、ガラスを入れたり、鉄を入れたり、いわゆる無機質の物がたくさん入っている。それがまた富の象徴のように、リッチの象徴のようにも、皆さん思っているふしがある。かたや、アメリカの石油会社の会長さん、ドクターシャンプーさんが建てた建物は、ほとんどが木で造られている。屋根も木、床も木、所々に強度をとるために鉄が使われている。個人の家で、総工費5億のお金が使われた。それが自慢の種である。

アメリカでは、木を大量に生活空間にもっていくことが、最も豊かであるというふうな感覚があるわけです。かたや、日本は金属と大理石と何とかと入れる、そういうものを入れたがる。トータル的にどの民族もバランスを取りたいんだなと思います。石の国は木を入れたい、木の国は石を入れたい。そういう意味では非常に面白い。

ここは木の国だから、木の物を欲しがっている国に輸出するあるいは商品を造って、海外に輸出する、家具を造っても日本より海外の方が売れる、マーケットはあると考えられたらいいと思います。

木を切ってしまうてからの話をいままでしたんですけど、今度は木を育てるという面でお話しします。

まず、オーストリーのケースです。あそこもやっぱり大量の森林があり、材木の輸出国です。オーストリーには、木を1本切ると、3本苗木を植えなさいという法律があるんです。それは個人であっても、企業であっても、地方自治体でも同じなんです。1本切れば3本植える。そうすると、環境的に緑豊かな国がずうっと続くということです。

アメリカでは、家の敷地内に、直径30cm以上の木があると、1本につき2000ドルの付加価値がつきます。

家を買いたい、庭付で、一戸建を買いたいと思う人は、木があるかないかが相当なウエイトがあるので、家が売れるか売れないかというところにもつながります。3本あれば、6000ドルの付加価値が付き、家プラス木代が支払われます。

日本の場合は、なんで更地にするのかわかりませんが、大木すばすば切っちゃう。それが非常にいたましいなという気がします。

もう一点です。テキサス州に、大量の木がありまして、人家、有刺鉄線などいわゆる建物が無い風景が、何マイルも続いているところがあります。そこに全アメリカからツーリストがどっと押し寄せます。州政府はこの土地の持ち主とある契約を交しました。

それは、見える所に建物を建てないという契約にサインすれば、100万ドルを政府が支払うというものです。基本的には緑を守るということですが、この緑はツーリストをテキサスに引き付ける目玉商品でもあるわけです。この目玉商品が個人の持ち物であり、そこにぼんぼん家とか、牧場とか、いろんな建物を建ててもらおうと困る。だけど拘束はできない。それで、土地はあなたのものですよ、森林もあなたのものですよ、ただ建てませんということで、1億円のお金を出しましょうという契約が成立したんです。結局、ソフトを守りましょう。そのためにお金を出しましょうということです。

その辺のところも、私は日本にはこれから必要じゃないかなと思います。特に、北海道のこの自然の豊かさは財産であるという認識をしてもらって、それに対する資金は惜し気もなく支払う必要があるんじゃないかという気がします。

北海道は、緑豊かな所に入って、木を切ることから始まった。そして、北海道の場合、開発長官というのがおられて、どんどん開発する。私はもう開発し尽くしたんでないですかと云いたいくらい開発していると思うんです。この状態を続けると、どこで止めるんですか。どっかで線引きして、ここまでだよっていうものを認識しなきゃいけない。もうそろそろ、そういう時期に来ているように思います。緑の大切さを認識して頂きたいと思います。

更谷 富造 氏 略 歴

昭和24年 4月26日 京都市にて出生。

- | | |
|---|--|
| <p>昭和42年 京都市立日吉丘高等学校，漆芸科（水内杏平先生に師事）卒業。
卒業制作展において，最優秀賞受賞。</p> <p>42年 日展審査員 漆芸家 鈴木雅也先生に師事。</p> <p>45年 父 木工芸家 更谷勝三のもとで，木工芸の仕事に従事。
「京都ハンドクラフト展」において，「ユーザー賞」受賞。</p> <p>46年 京漆器店 k.k.象彦に勤務。</p> <p>48年 ヨーロッパにおける漆器の保存状態など，査察のため渡欧。1ヵ月，ウィーン滞在。京都にて修理，復元，保存について学ぶ。</p> <p>50年 オーストリア国ウィーン市に移住。オーストリア国立応用美術博物館に勤務。
以後，9年間ウィーン定住。</p> <p>51年 オーストリア国立応用美術博物館において，Dr.フックス氏と共に「漆と其の技術について。」デモンストレーションを行う。
シュバルツェンベルグ侯爵，個人蔵の漆芸品の修理，復元。</p> <p>52年 国際交流基金からの派遣で，イギリス・オックスフォードで開催された「国際歴史，美術保存研究学会」において，発表。</p> <p>55年 ウィーンにおける「世界クラフト会議」において，実演。</p> <p>59年 ロンドンにおける「国際根付け研究会」に出品。仕事の様子をフィルムでも紹介される。
ロンドンのエスケナジー社にて，「漆芸小品展」を開催。</p> <p>60年 イギリス・ロンドン市に移住。以後，4年間ロンドンに定住。
オークションハウスのサザビーズ社，クリ</p> | <p>ステイーズ社およびアートギャラリー，個人蔵の漆芸品の修理，復元。</p> <p>62年 マイアミにおける「国際根付け研究会」におじめを出品。</p> <p>平成元年 アメリカ・イリノイ州シカゴ市に移住。以後，4年間シカゴに定住。
漆芸品の修理，復元会社「ヤマトインク」を設立。
ロサンゼルスにおける「国際根付け研究会」に出品。</p> <p>3年 サンフランシスコにおける「国際根付け研究会」に出品。</p> <p>4年 旭川市に移住。漆芸品の制作および修理，復元。</p> <p>5年 シカゴにおける「国際根付け研究会」に出品。</p> <p>6年 東京国際文化会館における「国際根付け研究会・日本支部会」にて，講演。
パリにおける「国際根付け研究会」に出品，「漆の復元と保存」のテーマで講演。</p> <p>7年 ニューヨークにおける「国際根付け研究会」に初めて印籠，根付けを出品。講演。
美瑛町に移転，工房「漆芸館」を構える。</p> <p>9年 東京芸大における，国立文化財研究所の会議で，「海外の漆の復元修理の状況について」講演。</p> <p>オーストリア・ハンガリア帝国のフランツ・ヨーゼフ皇帝の三大侯爵（シュバルツェンベルク侯爵，リヒテンシュタイン侯爵，アウグスブルグ侯爵），イギリスの二大オークションハウス（サザビーズ，クリスティーズ），世界各国の美術館，博物館に美術品を収める。</p> |
|---|--|

この講演は，平成12年 4月28日，当協会の総会終了後，当協会と社団法人日本木材加工協会が共催で開催した講演会で行われました。講師のご了解を得まして，本紙に掲載させて頂きました。